上野昂志の

黄昏映画館

第6回

イラストレーション★ユズキカズ

黒沢清の『地獄の警備員』は、きわめて潔く倫理的な映画である。

たとえば今日が六月二〇日ならば、あなたは、いますぐ『ガロ』を投げ捨て、渋谷のシードホールに駆けつけなければいけない。運が良けりゃ、黒沢清の『地獄の警備員』の最終回の上映に間に合うかもしれないからだ。善は急げ。本は待ってくれるが、映画は待ってくれない。その昔、どこかの出版社の広告に、読んでから見るか見てから読むか、といったふうな間抜けたコピーがあったが、そんなこと決まっている。映画なら、まず見ることだ。

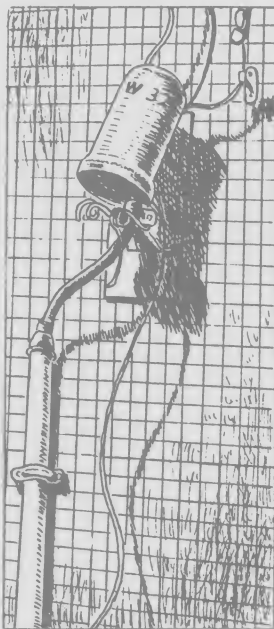
しかし、それにしても渋谷のシードホールで二週間とは、黒沢清も気の毒だ。われわれの力が足りないということはあるにしても、日本の映画界というのは、なんというところかと改めて思う。だいたい、シードホールというのは、西武お得意の多目的ホールというやつで、床はフラットだし、椅子は教室向きの簡易椅子だし…映画をちゃんと見るための場所ではないのだ。むろん、そうはいっても、他じゃ見れない映画をやるから仕方なく行くけど、そのたびに映画が気の毒になってしまう。そんなところで、おまけに二週間とは、いったい、なんなのだ。おあとはビデオでどうぞ、ということかもしれないが、それは、その程度の映画の場合のことで、黒沢清の『地獄の警備員』のような正真正銘の映画を遇する態度ではない。

実際、『地獄の警備員』は、今年公開された日本映画では、まず第一といってもいいくらいにスリリングな力に溢れた労作なのだ。これに較べると、世間の評判も良く、わたし自身も楽しく見た周防正行の『シコふんじゃった』なども、いかにもウエルメイドなその作りが、どこかで力を矯めたというか、尖った部分を土俵の中に丸く収めたというか、肝腎の勝負を避けたという印象がある。もちろん、処女作として『変態家族・兄貴の嫁さん』などという怪作を作り、ピンク映画界からもホサれてしまうというマイナーな場所から出発した周防が、日本の映画界でコンスタントに作っていく場を確保するためには、『シコふんじゃった』のようなウエルメイドな作品を作ってみせる必要はあったろうとは、わたしも思う。しかし、その戦略が、はたして意識的にとられた一種の擬態なのか、それとも、あれで良しとする本音なのか、よくわからない危うさが、映画そのものにも、本人のインタビューなどにも感じられるのだ。

それに対して、『地獄の警備員』の黒沢清は、前作の『スウィートホーム』で、伊丹十三をプロデューサーにしてしまったことの失敗をよく踏まえたところで、これを、きわめて真摯に作っているのだ。といっても、この映画は、娯楽映画の枠を逸脱しようというような前衛的(!)な作品でもなければ、難解な意匠をまとった作品でもない。むしろ、そのタイトルのB級的なノリが示しているように単純でストレートな作品なのである。

その単純さは、たとえば、美術館の学芸員をしていたヒロインが、新興の商社に新しく作られた美術品売買の課に入ったところ、翌日から、次々と人が殺され、その危険がついにはヒロインの身にも及んで、さあ、どうなるかという、要約すれば、ただそれだけの話にすぎないというところに、端的に現れているだろう。しかも、その犯人というか、次々と人を殺すものが、タイトルがすでに明示しているように警備員なのだから、ここには、物語的にヤヤこしい伏線がからむようなことはまったくない。にもかかわらず、映画が、シーンごとにスリルを孕んで終盤に向けてどんどん緊張が高まっていくのは、どうしてなのか。それが映画なのだ、といういい方はあまりに単純であるが、しかし、この『地獄の警備員』は、まさしくその単純さに向けて、限られた制約のなかであたうる限りの努力と工夫が傾けられているのである。

たとえば、タイトル前の、久野真紀子扮するヒロインがタクシーで初出勤するシーンである。まず、黄色味を帯びた光を背景に久野真紀子の上半身が正面から写り、まだ、だいぶかかるんでしょうか、という彼女のセリフとともに、渋滞で動かないタクシーに乗っていることが示されるのだが、そのなんとも苛立たしい停滞感がとてもいい。彼女の遠慮がちにせかす声に、運転手が、ワザとらしくドアを開けて、カアッと啖を吐くところなどいかにもそれらしいし、にもかかわらず、そんな細部のリアリティとは裏腹に、渋滞を説明的に示す他の車だとか道路の様子といったものは、いっさい写されることなく、ただ黄色い光に包まれた動かない車の内部だけが画面を占めているという大胆な省略が、われわれをごくスムーズに、日常的な異世界ともいうべきところへ導いていくのである。

ここには、いってみれば、日常的なリアルさと、荒唐無稽な虚構性とが絡み合っているのだが、以後の展開を支えているのも、基本的にはこの二つの要素である。もちろん、これは恐怖映画だから、主導権を握っているの

は、一貫して荒唐無稽な虚構性であり、黒沢清の映画作家としての倫理性もまた、そこにおいてはっきりと現れているのだが、それを支えている日常的なリアルさも重要であり、実際そのうえでの彼およびシナリオ（富岡邦彦／黒沢清）の工夫も、なかなかのものだと思う。とくに、それがよく出ているのは、ヒロインが勤める12課という美術品販売の部署における人物配置である。

そこには、中年の課長以下、キャリアウーマンふうの女性一人と男二人がいるのだが、それらが、いかにもそれらしい感じなのだ。課長だけは、やや誇張してカリカチュアライズされているが、そのほかは、やる気満々といった様子のキャリアウーマンも、何かというと新入りのヒロインにまといつく若い男も、やや髪の薄くなった冴えない感じのもう一人も、ああ、こういう連中は、その辺のオフィスで見かけたぞ、と思わせるのだ。とりわけ、課長が姿を消してしまったときに、それを男女関係のことかと誤解した若い男が、ヒロインを廊下に呼び出して、遠廻わしにあれこれ訊ねる場面などは、近頃評判のテレビの「トレンディー・ドラマ」の演出家など及びもつかないほどに、黒沢の演出は巧みなのである。だが、むろん、そういった細部の演出以上にこちらの目を打つのは、オフィスの廊下とか壁とか階段といった空間の描き方であり、光の当て方である。それは、一見なんの変哲もないビルの内部空間でありながら、見ているうちに、どうしても何か凶々しいことが起こらねばすまないと思われてくるのだが、そう思わせるのは、廊下の突き当りに斜めに射している光であったり、黄色い壁の前を歩くヒロインの顔を横移動でとらえたショットであったり、また、階段を昇りながらフト見上げた眼差しだったりするのだ。つまり、ここは『エイリアン』のような、あるいはまた黒沢自身の『スウィートホーム』のような、それ自体で異世界であることを告知するオブジェのようなものは存在し得ないところだから、一つ一つの画面の作り方こそが重要になる。それを黒沢清は、おそらくは乏しい予算のなかで、実によく頑張っているのだ。とくに、あれは給湯室とでもいうのだろうか、コーヒーなどを入れる部屋の入口に下げられたビニールのカーテン。といえば、即座にヒッチコックを思い出す人がいるだろうし、事実、この手の映画では、『サイコ』に限らず透明ビニールがよく使われるのだが、黒沢はここで、そういう先行する作品に負けないようなビニールの質感と、それを通して何かを見ることの独特に不安な感覚をよく出している。

そして、そのなかに登場してくるのが、われらの警備員なのだが、その描き方にこそ、黒沢清の倫理性が端的に現れているのだ。

富士丸君と呼ばれる、この新入りの警備員は、入ってきた翌日に仲間の一人を殺し、ついで12課の課長を殺し、というふうに殺人を重ねながら、次第にエスカレートしていくのだが、彼が何故そんなことをするのかということに、なんの理由も根拠もない。唯一あるのは、ある種の論理というべきか、つまり彼は、課長が殺されるのを目にした古手の警備員が、富士丸君、もう、わかったから止めてくれ、というのに対して、「何がわかったのか」といって、彼の首を締めあげる。そして相手が、許してくれというと、「何を許せというのか」といって、殺してしまう。いわば、わかるとか許すといった関係のあり方そのものを拒絶するという点で、彼は一貫しているのだが、だからといって、その拒絶になんらかの理由や根拠があるわけではない。だから彼は、ヒロインを追い詰めたときにも、俺の身体には俺だけの時間が流れているというだけなのだ。

要するに、彼の殺人にはまったく意味がないのだが、重要なのは、黒沢清が、その無意味さを、何か別のものによって——たとえば現代社会における不条理云々といった式の——説明をしたり理由づけすることを、いっさいしてないという点なのだ。徹底して無意味で、からっぽなのだ。そして、まさにその点にこそ、黒沢清の作家としての倫理性が端的に現れているのである。彼は、映画とそのための物語の組立て以外の何物にも依拠することなく、また、なんらの説明や動機づけも求めることなく、からっぽの無意味さのなかから、一つの虚構を作りあげたのだ。無から有を生み出したのだ。映画が映画であることになんの理由も根拠も必要でないという事実を身をもって生きてみせようとしたのだ。それは、映画が単純に映画であることの困難な時代にあって、きわめて潔く感動的である。

眠り男沖縄漫遊記

松沢呉一

vol.18

五月九日(土)

近江商法会星組（ライオン・メリーを除くエコー・ユナイトのメンバー三人と私）の練習のあと、新宿から小田急線に乗り、すぐに熟睡。目が覚めたら狛江。ありゃあ、寝過ごしちまった。電車を降りて反対のホームで待つうち、ベンチでまた寝る。目が覚めたら新宿行きが来たので飛び乗って寝る。気づいたら新宿。しまった、振り出しに戻ってしまった。照れくさいので一旦立ち上り、車両を移って、また熟睡。気づいたらまた狛江だ。悪夢か、これは。もう寝るまいと誓ったのに、新宿行きに乗ったら瞬時に寝る。起きたら梅ヶ丘。惜しい。次に乗り換えた電車は混んでいて座れなかったのが幸いし、遂に豪徳寺に到着。3時間の旅（まともに行けば20分足らず）。新幹線なら今頃大阪だ。「春眠暁を覚えず」との言葉では説明し切れぬ3時間である。

五月十日(日)

六本木キャラメルで「エレキテルナイト」。白夜書房の前田さんが主催で、三津間小太郎などお笑いの人や友沢ミミヨのユニット、近江商法会星組など、よくわからん顔触れが十組以上出演。それなりのホーミーを披露するが、次の段階に進まないと、やっている我々もそろそろ飽きるなあ。

五月十一日(月)

代々木公園でTBS「キャッチアップ」の収録。セックスをテーマにした3日間にセックス研究家の私も出演。研究しても実践しないセックスレス時代が7年ほど続いた私だが、「セックスマシーン化計画」の今年はハード・セックスライフを送っており、7年分のセックスを4カ月でこなした（平均的庶民感覚としては一カ月分くらいですかね）。これからは研究も実践もおまかせね。

キャッチャーの四人の女の子達がテーマに合わせてエッチな服を着ている。幸せ感じるジョアである。

五月十五日(金)

WOWOWの撮影で、今日から5泊6日の沖縄。一昨日から急に体調が悪化し、腹痛、便意、吐き気を堪えてタクシーで羽田へ。どこで下痢してもOKのインドは大変便利な国だったとつくづく思う。

小便が不味くなるので薬を飲まない私だが、JAL機上で美しいスチュワーデスの高橋さんにもらったワカモトを飲む。腹の具合が悪いのに、高橋さんに「コーヒーいかがですか」と微笑まれると断れず、おかわりも断れない。

下痢している間に那覇に到着。国際通り周辺に日の丸の小旗がたくさん立っている。本土復帰二十周年のための日の丸だが、沖縄に日の丸は似合わない（本土なら似合うっつうわけではないが）。

夜、コザの山羊（ヒージャー）料理店に行く。山羊は美味しくなかった記憶があるが、食べてみたら記憶よりもっと美味しくない。山羊ジューシー（雑炊）を口にした途端、強烈に舌と鼻を突く味と臭いに絶句。ヨモギ(フーチパー)と山羊の味が混じり合って、たいがいのものを美味しくいただける私も閉口。それでも徐々に慣れて、結局一昨日以来、初めてちゃんとメシを食った。高橋さんのワカモトのおかげですかね。

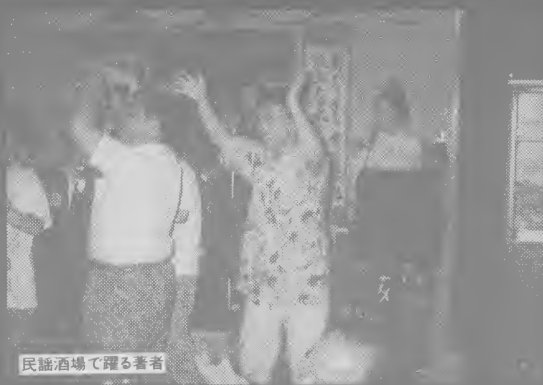
五月十六日(土)

雑誌ワンダー編集長、新城和博氏に会いにラジオ沖縄へ。新城氏はラジオ番組のゲスト出演をしていて、番組の中で、復帰二十周年はマスコミが騒いでいるだけ、沖縄は何も変わらないという話をしている。そういうものだろう。そういえば今日は日の丸がほとんど見当たらない。きっと誰かが外してしまったのだろう。やはり沖縄だと無性に安心する。

夜、金武へ。金武は米軍相手の歓楽街が栄えているという話だったが、全然活気がなく、早々に引き上げて読谷のトリイ基地へ。ここ数日、ビーチ・パーティをやっていて、日本人も基地に入れるのだ。パーティといっても飲食や射撃、輪投げなどのテントがズラリと並ぶお祭りで、数千人もの米兵や日本人がいる。金武に人が少なかったのは、皆こっちに来ているせいか。軍内の親睦、日本人住民との交流の意味合いもあろうが、最大の目的は米兵の性の処理ではないかと思われるくらいに、沖縄でアメ女（じょ）と蔑称される、ぶらさがり然とした日本女達がわんさかいる。

夜、怒声やサイレンがホテルの部屋にまで聞こえる。ベランダに出てみたら、すぐ隣のベランダに日本人の女がいて、その後に白人のブヨブヨ男が重なって外を眺めている。ビーチ・パーティでナンパしたに違いないと決めつける。日本人女はなんて軽いのかとお怒りになるムキもございましょうが、たいがいのアメ女は、嫉妬なんて抱きようがないタイプの子が多く、思わず「幸せになって」と心から応援してしまったりするものだ。

五月十七日(日)

夕方「かなさんどー」のヒット曲があるヤング民謡の旗手、ゲンちゃんこと前川守賢に会いにコザの結婚式場へ。ゲンちゃんは、今日、生年祝いの司会をやっているのである。

「エレキテルナイト」で大正琴を演奏する友沢ミミヨ嬢
(六本木キャラメルにて)

民謡酒場で躍る著者

生年祝いは誕生日会のこと。自分の干支の年をトゥシビーといい、この年にお祝いをする。とりわけ歳をとってからのトゥシビーや喜寿、米寿などの生年祝いは、公民館や結婚式場で盛大に行われる。

今日は新城マツさんの85歳（数え）の生年祝いで、親族、近所の人など、250人ほどが集まっている。左右に大きなステージがあり、次々と出し物が演じられる。一部ゲストとしてプロが混じっているが、あとは親族が演じ、どれもこれも見事。そして最後はカチャーシー（祝いの場、宴会、コンサートの最後に繰り広げられる踊り）で締めくくる。

こうして沖縄の人は、生年祝いや結婚披露宴毎に芸をしなければならない。これに限らず、日常がすべて芸の場だ。生活の中、体の中から芸がイヤでも出てきてしまう。

このあと、ゲンちゃんが「姫」という民謡酒場に連れて行ってくれる。沖縄の夜は遅くて、11時12時から民謡酒場に繰りだし、2時3時まで歌い踊っているのだ。

ここは我如古民謡グループの本拠地。親父さんの我如古盛栄さんの歌は熟成した魅力があるし、坂本龍一のレコーディングやツアーにも参加した娘のより子さんの歌は艶っぽくて、これまたよい。聞けば1日、3時間、4時間とステージ歌っていて、なるほど、あの微妙な節回しは、こうして鍛えられるのか。

時折客がステージに上がって唄ったり三絃を弾いたりする。そしてカチャーシーになると客が踊り出す。我々も踊ってみたが、簡単そうに見えながら、いざやってみると本土の人間と沖縄の人との差は歴然だ。

沖縄の芸の深さをまざまざと見せつけられた一日であった。

五月十八日(月)

腹も復調して食べ物の取材。いろいろな店を回り、腹パンパン。出されたものは残さず食う主義の私にはグルメ番組は無理だ。

午後、照屋時計店を取材。ゴモン・レコードをやっているレコード屋だ。全国的に知られるようになった丸福レコードの他にもいろいろな民謡レーベルがあるのだ。

夜、FM沖縄に行き、人気DJケン&マスミにインタビュー。彼らは普段、英語を主に使っているのだが、彼らハーフの間では、英語、標準語、方言がチャンポンになったハーフのウチナーグチ（沖縄方言）とでも言うべき言葉があるようなのだ。

6年前にDJを始めた当初は、「方言はかっこ悪いから使わないでくれ」と言われたのだそうだが、彼らはどれが標準語で方言かなんてわからず、普段の会話でやるしかない。

ところが、そういう彼らの放送が人気となって、現在ではFM沖縄を代表するDJとなり、彼等の放送もきっかけのひとつとなって、今度は若い人達が堂々方言を使うようになっていたりもする。面白い現象だ。

撮影までの時間が手持ち無沙汰で、思わず「ホーミーでもしてようかな」と言ってしまい、沖縄の映像スタッフが目を丸くする。ホーミーとは沖縄で女性器および性行為のこと、「マンコでもしてようかな」と言われりゃ、そりゃ驚くわな。

五月十九日(火)

明日東京に戻るので、本日海に行く最後のチャンスだったのだが雨。一度も泳がない沖縄旅行もいいかもしれない。買物と食事三昧。

五月二十一日(木)

ラジオのゲストに、リスの友沢ミミヨと福間ミサを呼ぶ。まだCDの1枚も出していないリスであるが、9月にフランスでコンサートをやるそうだ。「どうしてまたそんなことに」と問うと、「年頭にフランスに行こうと二人で決めた」と答える。何の根拠もなくそう決めたら、本当にそのあと話があったそうだ。こいつら、妄想実現力がハンパじゃない。リスの妄想には注目しておいた方がよい。

五月二十四日(日)

ミニコミ「PAPERS」創刊号を読む。原稿をコピーして袋に詰めるという形態のため、字数制限も締切も何もなく、私にとっては理想的な表現の場で、私はQ^2についての長文を書いた。Q^2についての膨大な思いは、量的にも内容的にも「PAPERS」のようなメディアでしか書き切ることはできないだろう（一旦鎮静したQ^2熱だが、この原稿を書いているうち復活、面白い話がいろいろあるが、詳しくは「PAPERS」の連載を参照）。

天久聖一、いとうせいこう、押切伸一、宮沢章夫などが寄稿しているが、みうらじゅんと佐藤克之の往復書簡が出色（本当はまだ他を読んでいない）。

二人の悪業（下半身の）の数々を、懺悔の如くおごそかに自らバラしており、アイドルやAVギャルらがイニシャルで登場。他はともかく、アイドルのH.K.って誰だ。片桐はいりじゃねえよな。気になって夜も寝られず。アイドルがテレビの楽屋でそんなことをするですか。そんなことばかりかあんなことまで。あんなことのあとも、またそんなことして。芸能界ってすごい。クリビツしちゃいました。

第9回　倶楽部イレギュラーズ　失敗は成功のもと

まう可能性もあるので、とととんでもない女だなあと思いながらも私は僕は俺はそれがしは、指で彼女の大小両陰唇を開いて中を覗き込んでいたのであった。

（以下次号）

などとふざけているところへ舞台下手から男があわられ、格子戸をがらりと開け「たのもう！」と叫んで上がり框に腰をおろした。

「どうれ！」どてら姿の主人が奥の座敷から玄関部屋に出てきて大仰に応える。

「ええい、ここで会ったが百年目だと思うような気もする。いやさお女将、飛んで火に入る夏の虫たあ、てめえのことだ！」

「お前さんいったい何をおっしゃってるの？　別れろ切れろは芸者の時に言う言葉じゃあーりませんか。今の私にはいっそ死ねと言ってくださいましな」

「ぽぽぽ僕にそんなことを言われても困るではないですか、いやだなあお嬢さん。いきな

しかし、たか子にとってこれは意外な行動だった。幸一郎がいきなり下半身の恥づかしい部分に指を挿入してくるとは思っていなかったからである。これはとても恥づかしかった。ああ恥づかしい。いきなり指をあそこに……、指をいきなりあそこに挿入するとは。もう恥づかしくて恥づかしくてどーにもこーにも。

だだだけど、気持ちいいんだからしかたないじゃないの、とたか子は思った。だって気持ちいいんだもん。気持ちがいいとまんこが濡れる。彼女はそういう女だ。

時は元禄十五年十二月十四日、降りしきる雪の中を突き進む火消し装束に身を包んだ侍たちの一群があった。これぞ世に謳われた赤穂浪士四十七名。亡き主君浅野内匠頭の恨みはらさんがため、宿敵吉良上野介の屋敷に討ち入ろうとする、いままさにその時であった。めざすは本所松坂町。ろうろうと鳴り響くは山家流陣太鼓！

けれどもそんなこととは露知らず、吉良邸の隣に位置するラブホテル「みやこ」ではいままさに幸一郎がたか子のまんこに勃起した

りそんな恥づかしいじゃないですか、ちちちんぽを見せろだなんて」
「するってえとなにかい？　お前さんは私にちんぽも見せられないてえ了見かい？　よしわかった。そんなことなら今すぐここを出て行っておくれでないか。そんな腹づもりでここへ来たとなりゃあ私にも考えがある。もう金輪際親でもなけりゃあ子でもねえ！」
「待っておくれ！」
「いや待てねえ」
「待っておくれ！」
「いや待てねえ」
　たか子は着ていたワンピースをするりと脱ぎ捨てると、シュミーズ姿となってベッドに横たわった。幸一郎はわずかに額に汗をかきながらジュースをぐぐぐいっと飲みほし、半立ちとなった陰茎を手で押さえてゆっくりとベッドへ向う。
「つよく抱いてね」
「つよく抱くとも」
　二人の間には欲情という名のけだものが今まさに目の前の餌に飛びかかろうとしていた。
　幸一郎の陰茎はすでに第一ちんぽ汁で濡れていたし、たか子の陰唇ももはやまんこ汁でぐっちょんぐっちょんの状態であった。こんなすけべな状態はめったにあるものではない。二人はいつセックスをはじめてもおかしくない状況に突入している。むづかしいレトリックはもう必要ないのだ。
　幸一郎はベッドに入るとまずたか子の木綿のパンティの横から右手の中指を陰唇に差し込み膣内に挿入、それからおもむろにたか子の口唇を奪った。

TEXT:
DAN TAQUASUGUI
GRAPHIX:
HÉIQUITI HARATA

CLUB IRREGULARS

陰茎を挿入して激しいピストン運動を繰り返している最中であった。
　ぱこぱこぱこぱこぱこぱこぱこぱこぱ、うっ。
「だめっ、だめよまだイッちゃ！」
　しかし、たか子の悲痛な叫びも幸一郎の早漏体質の前には所詮無駄な抵抗だった。
「だって、あんまり気持ちがいいもんだから」
「わたしも気持ちよかったわ」
「愛してるよ」
「愛してるわ」
「じゃあ僕のちんぽ、舐めてくれるかい？」
「幸一郎さんもわたしのまんこ、舐めてくれる？」
「君が僕のケツの穴を舐めてくれたら舐めてあげてもいいよ」
「幸一郎さんがわたしのケツの穴に指を入れてくれたら舐めてあげてもいいわ」
　こうして、下品な会話は夜が白々と明けるまで繰り返されたのであった。
　いっぽうその頃、首相官邸では前日から夜を徹しておこなわれた閣議もいよいよ議論の終焉を迎えようとしていた。
「総理、ご決断を！」
「うむ。結論を言うならば、私としても肛門に指を挿入されるということに対してけっしてやぶさかではないということになる」
「総理！」
「総理！」
「うむ」
　かくして前衛の夜明けはこのページにも曙をもたらし、失敗を恐れぬ開拓の精神はここに一輪の花を咲かせる結果となったのである。わが逸脱倶楽部の前途に祝福あれ。

犬も歩けば

四方田犬彦

連載第55回

VOLUME 55

バッハがオペラを作ったら…

ILLUSTRATION BY:やまだ紫

四月八日

ポーランドから帰った翌日。一カ月以上の間局留めにしておいた郵便物を整理していると、深夜にぶらりと島田雅彦がやって来て、酒を呑ませてほしいという。まるで大学生が同級生の下宿を訪れるような感じだ。呑んでいるうちに、この家に下宿したいといいだす。どうやら来月、セゾン劇場で演出する芝居のため、勝鬨三丁目の稽古場に毎日通っているらしい。「文学界」に掲載された渡部直己による中上健次インタヴュウを読んで、いろいろなことがわかる。やはり癌だったのだ。

四月十四日

東大駒場の比較日本学科に兼任講師として呼ばれ、初講義を行なう。一年間の授業の演目は「泉鏡花と日本映画」。前学期は『滝の白糸』を、後学期は『婦系図』を中心に授業を進める予定だが、教室に入ってみて驚いた。小さなモニターが一台置かれているだけで、ヴィデオを映写するスクリーンも何もない。これでは昭和三十年代のラーメン屋で力道山のプロレスをTVで眺める、といった授業しかできそうにない。聞くところによると、駒場には現在スクリーンの使用できる教室が一つしかないのだという。信じ難い設備の悪さだが、これで「表象学科」の看板を揚げている研究室があるのだから、呆れ返る。

四月二十日

香港映画祭にて李香蘭国際シンポジウムに参加する。香港側の映画史研究者は広東語で、刈間文俊は北京官話で、ぼくは日本語で、佐藤忠男は日本語でそれぞれ発表を行なう。李香蘭はそのたびごとにリコウランと呼ばれたり、リシャンラン、リホンラン、山口淑子、シャーリー・ヤマグチと呼ばれたりする。名前の多さが彼女の生きてきた人生の多彩さとみごとな越境ぶりを物語っている。『秋の童話』を撮った張婉婷(メイベル・チャン)がシンポジウムでは隣の席で、今度李香蘭の伝記映画を撮るのだという。主演は中国の「百恵ちゃん」鞏俐(コンリー)と決まっているそうだが、あんな大造りな女でいいのだろうか。客席から大学生らしき青年が質問の手を挙げ、あのお、主演にはジュディ・オングさんが一番いいと思うんですけど、と気弱そうにいったので、会場に笑声が起きる。李香蘭のフィルムはクリステヴァの説く他者としての女、他者としての外国人という主題の交叉線上にあり、いつか機会を見て掘り下げてみたい。台湾映画『サヨンの鐘』で彼女が高砂族の村娘を演じていたのを見ることができたのが、収穫といえば収穫だった。

四月二十二日

はじめてマカオに行く。香港上環から快速フェリーに乗って、わずか三〇分の行程だった。時間が停退しているような不思議な気分に襲われる。人々の立ち振舞いがひどく緩やかに感じられるのは、速度に取り憑かれた香港から来たせいだけでもあるまい。雨が降り出し、慌てて入った教会堂では人々が聖マリアの像を前に一心に祀っていた。「昼顔の見えるひるすぎぽるとがる」という郁乎の句をふと思い出す。

四月二十九日

高校の同級生だった矢作俊彦から映画出演の話が来るが、日取りが合わず見送ることになる。いっしょにいた中平まみが、わたしがかわりに出たいという。

五月二日

TVを見ず、新聞も読まずに何日も机にむかって原稿を書いている。中野翠と電話をしていて、ロスアンジェルスで何が起こってるか知らないの、といわれる。久しぶりにTVのスウィッチを点けると、燃えさかる商店と暴徒たちが映っている。黒人による韓国人への暴行が今回の騒動の特徴であるらしい。数年前、NYの韓国人街を北島敬三と取材に訪れたときにも、彼らの仲の悪さには驚いたものだ。もっともこれは人種暴動というより、貧富の差から来る

階層間の衝突だろうという印象をもつ。

五月四日
澁澤龍彦未亡人龍子さんを北鎌倉に訪れる休日の駅付近は観光客でごった返していて、なかなかに足が進まない。夕方に菊媚を呑みながら話していると、地方から来たファンだけれども家の写真を撮ってもいいか、という未知の訪問客がやって来る。どうやら澁澤邸が博物館になって一般に開放されている。と思いこんでいる愛読者たちが少なくないようだ。龍子夫人は、今はお客様が来ているからといって、庭の撮影だけにしてもらう。われわれが呑んでいる間中、ウーチャンという兎が床の絨毯の上を飛び廻っている。

五月十日
NYで五年前に知りあったダンサー、ハリー・シェパードが死んだことを、OCSニューズで知らされる。死因は、一瞬ひょっとしてと思ったが、やはりエイズだった。ハリーはヨシコ・チューマの相棒で、針金のように痩せてニコニコした黒人だった。急旋回をすると、まるでクマンバチが飛んでいるような感じがした。四十歳くらいだろうか。NYのポストモダンダンスのホープと「ヴィレッジ・ヴォイス」に書かれたこともある。いつかパリに行ってきたよというと、眼の色を変えて、それでパリはどう変わってた？　と執拗に尋ねてきた。若い頃に理由があって長くパリに行たのだと、後で知った。ゲイだということは知っていたが、なんとも無念な気持だ。
ヨシコ・チューマに慰めの手紙を書く。

五月十二日
島田雅彦の演出した『ルナ』をセゾン劇場へ見に行く。感心しない。島田はクラシック音楽についてディレッタントかもしれないが、舞台の上で音響をどう組織するかということを、まったく理解していない。スタジオ2〇〇が閉じてしまったことの弊害がこんなところに出ている。村上龍の映画のように、演劇が島田にとって悪癖にならなければいいが。

五月十五日
札幌に住む岡田史子とはじめて電話で話をする。今から二五年も前に創刊されたばかりの「COM」誌でデビュウし、一部に熱狂的なファンをもちながらも、数年にして忽然と行方を晦ませてしまった謎の女性漫画家である。そのすべての作品が現在入手不可能である。なんとかキチンとした作品集を世に出したいものだと思い立ってとある出版社に企画をもちこんでいたのだが、肝腎の彼女の連絡場所が不明で困り抜いていたところだった。深夜叢書の斎藤慎爾が懸命に諸方面に電話をかけまくり、ようやく発見してくださったという次第。電話口の岡田さんはこちらの突然の申し出にいささか驚いていたようすだが、ひとまず快諾していただけたので、ホッとする。
岡田史子という幻の天才漫画家のことを、これまでぼくはどれほど多くの人と話しあったことだろう。伊藤比呂美・川本三郎・吉本隆明。彼らはいずれも『赤い蔓草』の作者を讃美してやまなかった。六月には彼女に会いに札幌に向かわねばなるまい。

五月二〇日
信濃町の慶応病院に中上健次を見舞いに行く。思ったより元気そうなんで、お前、がっかりしただろう、という。彼は熊野に一大文化拠点を設立する夢を滔々と語り、陳凱歌は今何してんだ？　と尋ねる。

五月二二日
十四年前に書いたっきり放り出してあったスウィフト論の一部を今回発表することになり、出版社より送られてきたゲラに手を入れる。若書きのレオナルド・ダ・ヴィンチ論を前にしたヴァレリーではないが、昔の自分の文章をひとたびの忘却ののちに読むことは、気恥かしい体験だ。というのもそれが自分の文章でありながらも、他者の文章でもあるからだ。六八〇枚に及ぶこの論文を刊行しえたとき、ぼくは二四歳のぼく自身と和解することになるだろう。

五月二七日
チューリンゲン大学名誉教授でバッハ研究の世界的権威であるフォン・ダーデルセン氏の講演「バッハの一週間」を聞く。バッハはどうやら信じ難いほどに多忙な毎日を送っていたらしく、週の中ばに恐ろしい速度でコラール曲を書き飛ばし、楽譜が完成するやただちにリハーサル、日曜には発表という日々を過ごしていたらしい。いくつかの専門的な質問が観衆の間から出る。ぼくは前々から気になっていたことを老教授に尋ねた。バッハはどうしてオペラを作らなかったのですか。突然に彼の顔がにこやかになり、いや実は「バッハがもしオペラを作ったら」という論文を書いたことがあるのだよ、といわれる。

久住昌之の出たとこ勝ぶ

VOl. 6

「人間から金が出てくる」

個展に向けて毎日絵を描いているせいで、色に関して過敏になっている。

たとえば緑。植物の緑を見ると自分の才能の無さというか、植物の生きている緑の美しさにいちいち圧倒されて打ちひしがれる。こんなものが絵の具なんていう無機物の配列で再現というか変換できるわけ、無い！と思ってしまう。

人間の肌の色とか。口紅を塗ってない唇の色。瞳の黒。黒といえば夜の黒、闇の黒も難しい。

まー自然に対して「立ち向かおう」なんて思い上がったら、それこそミジメな思いをするだけなんで、できるだけ普段の、ニュートラルな、くだらない冗談ばっかり四六時中言ってる自分のままで、マンガのコンテのつもりで絵の具をキャンバスに置いていこうと思っているんですが。

なんて、頭が絵になっているので文章がどうもうまく書けない。

だから色についておかしな思い出を、思いつくままに書いてみようと思う。

ボクの友人に、七色のウンコをした男というのがいる。黄色、茶色は当然、十二指腸カイヨウなど病気をやってるせいで、バリウムを飲んだ時の白い便、血便の赤、まっ黒な黒便、ある種の薬を飲んだ時には緑便という緑のウンコをしたそうだ。

黄・茶・赤・白・黒・緑、あと一色何色だったかな。

まさか紫じゃないだろうな。

ムラサキのウンコが出たらコワイな。風呂敷だとか和服にあるような紫。目のさめるような。お香の匂いがしたりして。

パープルというとまた別の感じだな。西洋っぽいというか、水商売というか、オカマというか。ディープパープルやパープルヘイズというとロックだ。

パープルの大便なんて、かっこいいのか悪いのかわからない。大便にかっこいいもクソもないか。なんて。

以前、道端に、こういう、

犬のフンがあって、要するに、こう地面から一部が立ち上がっている。それを見たサトウ君のお父さんが、

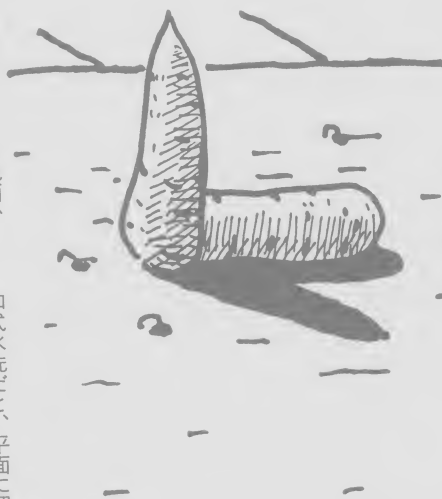
「お、タチのいいウンコだな」

と言った。これはサトウ君のお父さんが今まで言った全冗談の中で唯一ウケた冗談だそうです。

余談ですがボクとしてはサトウ君のお父さんが入れ歯を外してニッと笑った、

「フランキー堺」

という冗談も好きです。なかなかやってくれないんですが。

それで何の話だっけ。

そう、タチのいいウンコはあれど、かっこいいウンコなんてない、という事が言いたかった。

ウチは洋式便器なんだけど、洋式のツマンナイところは便が水の中にタテに入ってしまって、その全貌をつぶさに見る事ができない点。いやツブサとはいわないまでも。

和式水洗だと、平面に置かれていく感じでしょ。始まりから終りまでが並列で、2ーDで見れる。洋式だとタテに、こう、先が水の底の方に行っちゃって、上から見ると3ーDなんですね。

今3ーDが身のまわりの人達の間で盛り上がってきてるけど、洋式便器にした形のよい便の立体写真なんてどうかな。

やっぱりキタナイですね。そんな写真をビュアーに入れて、

「お！出てる出てる」

なんて。裸眼立体視。うわ、なんかキタナイなァ。ダイレクトに脳にウンコを送り込むみたいで。どうもスイマセン。

実家にいた時は和式水洗だったので、したあと、一応、一応見て形状、総量、色彩等々が確認できた。

先端の方がゴツゴツとふしくれだって男らしい、握りコブシのようなウンコなのに、ラストに向かってナヨナヨとして、最後は色も薄いのがヒョロリ～ンなんてなってお しまい、とか。まさに竜頭蛇尾！　とか。

細くて一見軟弱なのに、意外なほど長い、とか。まったくコイツ、こういう長さでオレの腹ん中に収まってたわけ？　と思うと、ほんとやんなっちゃう。

あと何本にも分かれて出てくるタイプ。し終ってふっと見たら、川の字にきれいに並んでたりして。おいおい、そんなとこで整列してどおすんだよ。

飲み過ぎて下ってる時の、最悪がラストが泡っていうやつね。あれ最悪。エンディングがバブル。言い訳のしようも無い。

そうそう、和式水洗のいいところって、なんか、便が川の字ばかりでなく、何らかの文字に見えたりする楽しさね。

「と」

とかね。

「ヌ」みたいものあった。

「よ」に見えるのもあった。

なんか意味があるんじゃないかという気がしてくる。大便占い。「よ」が出たら「よせ」とか。

よくイラストにあるトグロを巻いたウンコというのは、できそうでできるもんじゃない。

親戚の小学校一年ぐらいの男の子が、「あれって、こ～やってするのかな？」と中腰でお尻を回してみせ、ボクは大笑いしてしまった事がある。子供も子供なりにトグロウンコに疑問を持っているのだろう。

ところがしかしボクは、トグロまでもいかないが、

「Q」

というのをした事がある。点がリアルでしょ。

その時は「おーっ」と思いましたね。誰かに見せたいというか、流すのもったいないというか、拭いたトイレットペーパーをその上に落としたくないというか。

作品、という感じがした。意を決して流したけど。

ところがその後もっとすごいのが出た。

「ぬ」

これは仰天しましたね。いったいどういう意味があるのかと思った。思ったと同時に一人トイレの中で「ぷっ」と吹き出しましたけどね。ウンコでぬの字書いてどーすんだよオマエ、みたいな。人知れず。ぬですよぬ。複雑極りない高等テクニックを要する作品でしょう。ピアノで言えばリストですか。

オレの肛門も何やってんだか。いやウンコに意志があったのか。彼は彼なりに、主人であるボクに伝えたい何かがあった。

打ち消しを表わす「ぬ」だったりして。ならぬ。なりませぬ。

あの女の人を好きになってはなりませぬ。とか。今やろうとしているバイトはやめた方がいいとか。その旅立ちはよくない、とか。

そんな事も無いか。

単にウンコは、ぬっと出てきた、というんで、ぬ、なんて洒落てみただけだったりして。志村けんみたいなウンコだ。

まったく何言ってんだか。

何の話してんだか忘れてしまった。

……前の方見たら、色の話を書いてたんじゃないか。なんでウンコでぬの字書いた話してんだ。しょうがないなァ。もう戻れないよ。

ムラサキはまだしも、透明のウンコってあったらすごいですね。ってこれは飲んでる時昔赤瀬川原平さんが言ったんだけど。

透明のウンコ。

しかもちゃんと臭いの。

困るなァ。その透明の中に、何かメタリックなキラキラしたものが入ってるとか。あるいは何か和菓子みたいに透明の中に、みかんとか梅とかが入ってるとか。

あ、ピンクだ。梅で思い出した。梅の花で。友人の七色の便の残された最後の一色。謎解きは終った。話が頭に返ってきたぞ！

いや、まてよ…オレンジ色だったかな。

水色っていうのも気持ち悪いな。ミントの香り。食べるとスーッとしそうなってヤメロよな!!

でもミントって、なんであのスーッとする味がするのか、不思議ですね。しかも、ミントの生の葉っぱ、あれを嚙むとちゃんと、スーッとして、あの香りが当然ながらする。あれがなんか最初不思議だった。植物なのに。

アボガトの刺身というのを食べて、マグロに似てた時もヘンだった。こいつ野菜のくせに魚の味がするって。考えるとキモチ悪いけど食べるとおいしい。

トマトに醤油というのも色彩的にマズソウだけどおいしい。トマトを薄く輪切りにして、水にさらしたオニオンスライスをのせ、かつおぶしをかけて、お醤油をかけて食べる。これがおいしい。

しかし、生き物の色というのは不思議だ。日本人であるボクは、いろんなもの食べてこういう肌や髪の色してるのはなんとなくわかるが、同じようにいろんなもの食べて、髪の毛が金色で、眼が青くなるって、いったいどうなってんだろう？　と思っちゃいますね。金なんて色じゃないのにね。デザインの時なんて特色ですよ。金銀メタル螢光は2色分のお金かかるんですから。

青林堂の本の装丁する時は予算が無いからなかなか金銀使えないっすよ。4色が基本だから、金を使うとあと2色しか使えないっスよ。大変なんすから。

だから今度扶桑社から出す「脳天気」の装丁はザ・ステューディオにやってもらったんですが、やりたい放題。青一色にニス塗ってカラ押しして、黄色のバーコインク（ふくらむインク）でタイトル入れてんだから。でハードカバーで中は銀色。400ページもあって1600円は絶対安い！

なんて最後は宣伝なっちゃったぜ、どーするよ。でもよろしく。

MONTHLY? READERS' 4koma GARO SPACE edit.by C,Shiratori

4コマGaro VOLUME 42

▼今月の元気があって宜しい。

浦和市のばーばりあん作

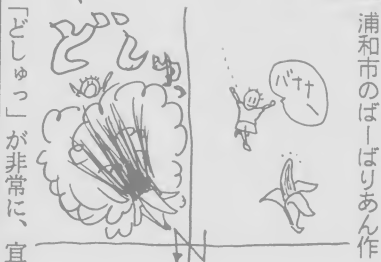
「どしゅっ」が非常に、宜しい。

大田区の金森幹也作

女（暴力の方）が非常に、宜しい。

豊中市の奈落クイズマスター作

「ポヨちん」が非常に、宜しい。

♥今月の一発目！
長野県のゆか沢テクノ作

♪好きにして「失恋レストラン」とは古いけど…

▼今月も絵が素敵♥
清水市の伴野真理子作

夏の猫に気をつけろ!!

「４コマ目の女が佐藤有文の本に載ってる魔女（の絵）みたいです。」との事だが、小生も妖怪図鑑、悪魔図鑑は一時期座右の書であった。やっぱり絵が一等賞なので今度漫画を描いて送るように。必ず。

コレもT.Mさん筆　舌がまっかっか　スイカバー中毒患者

ガロも4GAROも読者新旧交替が激しいようである。かつての「師範」も見る影がない。寂しいことではある。　アンバサ

神戸市のジョニ村ヘロ美作

異常性欲も発散できるのであろうか。

▼今月の時給８００円也

はっきり言って、「隔月掲載になっても楽しみにしてます」に泣けた。

▼今月の尋ね人
ハワイの（ウソつけ）大友克洋作

そういう訳で、サル師は今、どこに…

郡山市のスキニーパピー作
確かに、意味は判らんぞよ。

杉並区の坂ニワテル美作
3コマ目の「間」で選んだ。

小田原市のヘンリー梅吉作
そう、続きなんていらんのだ。

熊本市の吉住恵理作
何となくイタガキ氏を思わせたので。

佐賀市の遊童いずる作
ゆーどーは、やっぱり、怪しい。

大分市のいけうちしん作
ニールセダカ…パリダカ…カリダカ…

大阪市のフジタケンイチ作
画面をもっと整理するとよろしし。

世田谷区の直田隆久作
…そうだな…。

新連載①
志村カツの
魅惑のイラスト

♥応募要綱♥
官製葉書か葉書大の用紙に必ず墨汁か黒インクで描いて下さい。中間トーンは薄墨不可。な〜んてかたい事ぁ言わねえが、縮小されるという事を考えた上なら何でも好きにやってちょうだい。治外法権の『ガロ』の中でも、当コーナーはその上さらに解放区となってるのだなこれが。

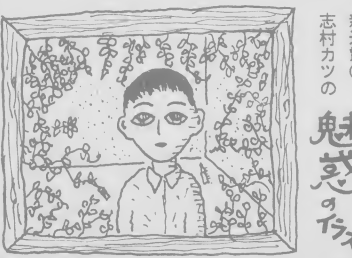
♥宛　先♥　㈱青林堂　4コマGARO係宛
〆切は毎月10日到着分まで。よろしく。

今月のすっとぼけ2発

北九州市の喜多一輝作

イルカとたたかう

作品はナイス。喜多は北か？本名か？

いわき市の逆井公鉾作

情ないところがすごく、宜しい。

◎今月の惜しい人達◎渋谷区／米山敏行（あと少し）●流山市／コールドオタッキー（ネタが古いので）●茨城県／電撃花電車（もーちょっと捻って）●神奈川県／小島美潮（続き描くよーに）●札幌市／井上寛子（絵は、凄くいい）●中野区／個地味田（それだけじゃ…）●札幌市／三甲みつお（頑張ってよ）●仙台市／鯖燻麻呂（絵は相変わらず、いい）●大宮市／国広謙二（君の事は、買っている）…異常の方々、そんな事言わないでまた描いてちょ。であります。ホント。
変換ミス(笑)

突然ですが

怪談募集

■クソ暑くもまばゆい待望の夏がやって参りました。夏と言えば、誰が何と言おうと『怪談』であります。皆様、当コーナー宛にどんどん送って下さい。また聞きでも可ですが、実話に限ります。

▼今月のＣＧ対決！

佐倉市の板垣修業作

4GARO版IDEN&TITYか？

札幌市の飯田健司作

技術点9・5……

と言うわけで、全く隔月連載にした訳じゃないのに結果的にそーなってしまっている当コーナーではありますが、作品ドシドシお寄せください。最近競争率がヒジョーに高くなって参りましたんで、そこんとこ宜しく。ではまた、来月（会えるかな？）だ。

埼玉県の山田花夫作

なんとかしてよ ドラえも〜ん

ありがちではある。これやばいスか？

東村山市の古島あーも作

生活水準命がけ by あーも

絵も話もナイス。クリちゃんとは一体…

お知らせとお詫びのコーナー

ええ、私めの『大阪ＤＥＥＰ紀行』にたくさん（な訳ないが）の「欲しい」旨お申し込みありがとうございます。も一少し、あと一踏ん張りであります。やっております。必ず発行します。かごめしゃの伊藤さん、いじめないでちょーだい♥

■今なら間に合うお申込先
実費¥500円分切手同封の上、㈱青林堂『白取大阪係』まで。

埼玉県の梶田純司作

ホンットーに、君は女なんだろうな!?

名取市のもちもち作

ハリガタくん

よだれが出そうではある。これホント。

マンガ評論新人賞設立

日本の現代マンガは、質的にも量的にもきわめて高度な発達を遂げ、諸外国からの関心も高まっている。しかし、実作に比して評論・研究は著しく遅れ、各種マンガ賞がマンガの実情を必ずしも反映しなかったり、ジャーナリズムのマンガ論議が的外れであったり、という遺憾な現象もしばしば見られる。このような現状を憂慮し、マンガ評論・研究の深化と拡大をはかるため、マンガ評論新人賞を設立する。

一九九二年五月一日

詮衡委員会（五十音順）

呉智英
村上知彦
米沢嘉博
協力「ガロ」編集部

1賞の種類と賞金

①マンガ評論新人賞（五十万円）
②同奨励賞（十万円）
③佳作

各賞に人数の枠は設けない。また、本誌掲載の場合、賞金の他に規定の原稿料が支払われる。

2応募資格

新人であること以外、年齢・性別・国籍等は一切問わない。新人とは、マンガ評論・研究の単行本を出したことのない者とする。ただし、自費出版はこの限りでない。マンガ隣接の文芸・映画・美術等の評論・研究の単行本を出したことがある応募希望者は、問合せをされたい。

3評論の対象・形式

現代マンガに対する未発表の評論・研究。種類や形式は限定せず、作家論、作品論、マンガ史研究、評論史研究、ルポルタージュ等を広く含むものとする。現代より前のマンガや外国のマンガに関するものも、現代マンガを考える上で有益なものは本賞の対象となる。

4詮衡

詮衡委員会の合議による。各委員のマンガ論・マンガ観と対立する作品であっても、そのことによる詮衡上の不利益は一切生じない。

5枚数・その他

四〇〇字詰原稿用紙で五〇枚前後。内容によっては三〇枚程度の作品も考慮する。ワープロ原稿も可。いずれも、日本語・縦書き、点字原稿は墨字訳を付ける。必要な図版類があれば、出典明記の上、コピーを貼付する。また、本文の後に、住所・氏名・電話番号・生年月日・最終学歴・職業を記した別紙を添える。応募原稿は返却されない。

6締切り、発表

毎年十二月十日を締切りとする。結果は翌春の「ガロ」誌上で発表される。

7本賞の存続

本賞の賞金および掲載作の原稿料は、呉智英『現代マンガの全体像・増補版』（史輝出版）の印税によってまかなわれる同書の印税発生がなくなった場合本賞の継続が中止されることもある。

あて先　〒101　東京都千代田区神田神保町一－六二　青林堂内「マンガ評論新人賞」係

月刊ガロ新人大賞 長井勝一賞 募集

月刊『ガロ』は、1964年の創刊以来、商業的には小さいメディアながらも、常に新しい才能を発掘し、新しい表現分野を開拓してきました。『ガロ』からデビューされた作家の方々は、単に漫画という一表現にとどまらず、様々な分野で活躍されている方も少なくありません。また『ガロ的』という言葉も、やはり単なる漫画という一ジャンルのものではない筈です。ですから、漫画作品として優れている事はもちろん、今後の幅広い活躍を予感させる、ユニークかつ独創性のある作品を募集します。

商業誌に未発表作品であれば、従来の「漫画」という様式に囚われない斬新な作品でも結構です。（ただし作品として完成されたもの）

今後『ガロ』への投稿作品はすべて長井勝一賞の選考対象となります。

※応募要領※

①原稿内枠サイズは、天地が273㎜・左右184㎜です。
②一色で、墨汁または黒インクを使用のこと。
③せりふ、ナレーションは鉛筆で入れること。
④うす墨は不可。中間色はスクリーントーンを使用してください。
⑤原稿用紙全体の大きさは問いませんが、断ち切りは15㎜以上延ばして下さい。
（従来のガロ投稿作品要領と同じです）

※応募規定※

※年齢・性別などは一切問いません。
※必ず原稿の最終頁の裏に、住所、氏名、年齢、電話番号を記入して下さい。
※原稿返却希望の方は、切手貼付の上、返信用封筒を同封して下さい。

投稿宛先　〒101 東京都千代田区神田神保町1-62
（株）青林堂　長井勝一賞選考係

審査員長　長井勝一（青林堂会長）

他審査委員に漫画家・作家・イラストレーターなど多彩な方々をお迎えする予定です。（決定次第誌上で発表いたします）

※選考結果の発表は、月刊ガロ誌上で行う予定です。勝手ながら、お手紙やお電話でのお問い合わせは一切お断りさせて頂きます。

読者サロン

今月の有難ひ御言葉(みことば)

アンケート葉書編

じてんしゃ

林静一氏の特集、もちろんとっても良かったです。昔、ロッテのプレゼントでもらった「小梅ちゃん」の親子エプロンを10年ぶりに取り出してニヤニヤしました。【平塚市・27才・女】

ロッテの小梅ちゃんの絵を描いていた人が林静一さんだったということにショックを受けた。まだあの頃は私はガロという雑誌を知らなくて、あのCMを見ながらなぜか線の細い絵に憧れていた。【日立市・17才・女】

林さんの特集は、何と言うか、感動的でした。今回のインタビューでは、自分の思い込みの勇み足をたしなめられたり、逆に勇気づけられたりしました。【入間市・24才・男】

個々の作品はそこそこの出来でとくに悪いものもないが、とび抜けたものもない。今月号、もの足りなく感じたのは、私だけだろうか？【市川市・27才・男】

読者サロンで23才女さんが言ってたようにガロがガロを論じて欲しくない。それと…昔の作品をもっとリバイバルして。ガロって最近メジャーだね。【神戸市・21才・男】

アンケートに「ガロはガロを論じてほしくない」とありましたがこれからのガロのためにやらなければいけないことだと思います。もっと早くからやるべきだったと思う。なにしろ今のガロは熱くていい！ガンバッてください。【横須賀市・21才・男】

根本さんのマンガ読めて嬉しい。この前大阪のクラブクアトロデ根本さん出演のライブがあったんで行ってきました。たいへんよかった。サインまでしてもろた。ひひひ。【兵庫県・17才・女】

お母さんがみて私が白い目であまりみられないものをのせてほしい。【天童市・17才・女】

インタビューには、インタビュアーの名前をきちんと明記してほしい。【四日市市・21才・男】

私は、最近ガロは何となく習慣になってるから買う、ってえ感じで、前のように、ワクワクして買うってコトないです。でも、最初から最後までじっくり読むと、アー来月も買おう♪と思いマス。【守口市・19才・女】

もしも…杉作J氏のマンガ及びギャンブル新聞がのっていなければおれは「ガロ」を買わぬかもしれぬ…という恐るべき想像をしてしまうほど私は杉作主義者だという事を「ガロ」に向けて宣言させてもらったい…【世田谷区・24才・男】

…どうせもうすぐ、キリスト教の時代は終しまいだ。ノストラダムスの予言といっしょに。な～んて『ねこぢるうどん』を読んで思っちゃったりして。【いわき市・17才・男】

安彦さんは林静一さんのタタミの目のこと書いてましたけど、私は安彦さんにはタタミのへやのでてくるのをもっと描いてほしいです。【清水市・18才・女】

「ZCHAN」、いいなあ。脳みその奥の奥の毛細血管あたりにまで深くうったえてくるなあ。なんだかとってもいとおしい。【神戸市・12才・女】

時々「ガロ」がすご～く読みづらく感じられる時は疲れているのか、その時急に年を感じてしまう時なのかはたまた、人間的に余裕がない生活をしているのか…【山口市・43才・女】

「うきーで一発！」とても面白かった。主人公の発言が、ホントにすごい。【いわき市・18才・男】

初めてこれを出します。創刊した年から読んでいます。とりあえず買い続けるけど「朝日ジャーナル」も休刊したしなあ、私も年とっちゃって、年金ぐらしでは買えないかもしれませんね。【上福岡市・41才・男】

中学の担任にガロのことをノートにだらだらかいて出したら、いつもは一言かいてくれるのにその日ははんこう1つでおわってしまいました。【北本市・15才・女】

近頃の新人さんは、なにかかたよりすぎちゃってるみたいで、素直に入り込めません。ガロはエンターテイメントじゃないからでしょうか？【横浜市・21才・女】

期待していた以上に、「IDEN&TITY」はジ～ンときた。【福岡県・18才・女】

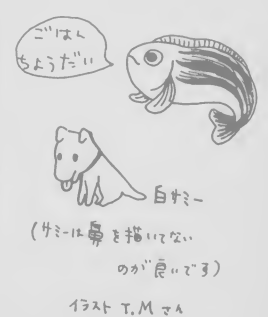
ぜひ村野守美の特集をしてほしい。【八街市・21才・男】

もっと早くみつかればよかったケド知ってからページを開くまで半年もかかってしまった。私はまりそーです。【渋谷区・17才・女】

山田花子の特集をしてくれ!!【釜石市・20才・男】

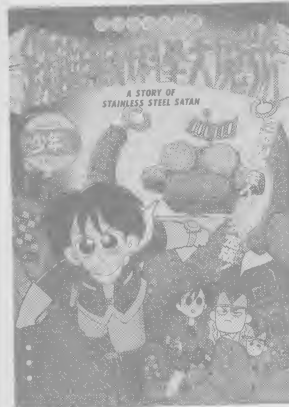
ごはんちょうだい
白サミー
(サミーは鼻を描いてないのが良いです)
イラスト T.M さん

Gossip & Book INFORMATION

近作が待たれる望月かつひろうコト勝広先生が舞台美術をし、さらに出演もしているのデハと推測される劇団『らせん劇場』の公演『ジャングルラブ』が静岡市で行われます。7月5日、11日、12日3日間。お近くの方は問い合わせ先☎0542－52－3922、ダストメモリー内日出町オフィスまで。

♠7月2日までの個展の準備に**てんやわんや**（死語）の**やまだ紫先生**の全集の5巻目、**「性悪猫／鈍たちとやま猫」**が出ました。青林堂より以前刊行されたものに、単行本未収録作も加え、さらに**「たま」の知久寿焼氏**との対談漫画、**イラストしりとり**が入っている。今なお評価の高い「性悪猫」シリーズのあとにこのよーな**おふざけ**が入っているたぁ、**やるざんすね**。という訳で、筑摩書房より定価千七百円は**お買い得**。

㉘**勝又進先生**といえば4コマ漫画から情緒溢れる短編作品まで幅広い作風でわれわれを楽しませてくれますが、その**素晴らしい色彩画の世界**をじかに鑑賞できるチャンス！です。阿佐ヶ谷駅南口のパール街中程、婦人服店「スミレ」奥の画廊喫茶「ＣＯＢＵ」で7月9日(木)から21日(火)まで行われます。お茶など飲みながら勝又先生の**優しい世界**にひたる…**水曜日は休み**なので皆、気をつけよう！

☾ＴＶＣＭ等でもますます活躍中の**たむらしげる**さんの新しい絵本が出版されました。**「クッキー・サーカス」**。おかあさんにもらったクッキーのもとでクッキーをつくったら…。**とても楽しい絵本**です。架空社より定価千300円で**好評発売中**です。

☆**唐沢なをき先生**の空想科學まんが決定版！**「鉄鋼無敵科學大魔號」**（徳間書店刊・定価650円）が**絶賛発売中**です。全体がまるでふろくまんがのようなつくりになって、**ばっちりおもしろい唐沢先生のまんが**をさあはやく読もう!!

!!お待たせ致しました。**シバ**（三橋乙椰）のニューアルバム**『帰還』**がついに出来上りました!!（定価三〇九〇円　販売・問合せは162頁参照のコト）。鮎川誠　梅津和時　知久寿焼氏らの豪華ミュージシャンをゲストに、心地よい**ブルース・ロック**で楽しめる、**カッコイイシバ**の久々のＣＤ!!　これが、ナ、ナント、読者**3名様**に**プレゼント**だ。欲しい人は、すぐにハガキを送ろう。〆切は**7月20日消印**、というコト!!

◎エコロジーブームと言われているが、「エコロジー」が「ブーム」になってしまう滑稽さに気が付かないおめでたいこの国に、ついに怒りを爆発させたこの本、**『環境でぷん！』**が出た。といっても**原律子、まついなつき、佐々木望都子**の3人が、対談、漫画、イラストなどで静かに怒る、説教臭くない楽しい本だぞ。**さくらももこ、吉田戦車もご推薦**のこの本、「**馬鹿売れしないと採算が合いそうもない本**を作ってしまった」と泣いている『ほんの木』さんが、**泣きながら3名様に読者プレゼント**をしてくれるそうなので、なるべく買うよーに。ちなみにプレゼントを欲しいという人非人は左記までどーぞ。『ほんの木』から定価１５００円！

〒101　東京都千代田区神田錦町1―17　ＮＫ第一ビル3Ｆ『ほんの木』「環ぷん『ガロ』係」（3名様）

♥今月の水木しげる
この『ガロ』が出る頃にはあの**復刻版『妖奇伝』**がお手元にオドロオドロしく存在しているであろう、**水木しげる先生のＨＯＴなニュース**♡読讀新聞鳥取版によると、ＪＲ境港駅前のメーン通りを整備中の境港市は、市出身の水木しげる先生にちなみ、このコミュニティーロード525ｍのうち240ｍを**「水木しげるロード（仮称）」**とすることを決めた。鬼太郎や目玉のおやじ、ねずみ男やねこ娘などをモチーフにしたタイルを敷くそうで、全体の総工費は四億三千四百万円！　そのうち「水木ロード」部分は早ければ**この秋にも完成するそー**なので、近隣の方はゼヒ行ってみよう！――また、先生の原作による**「カッパの三平」**が**来春にっかつ児童映画で公開予定**だ。水木先生から**目をはなすな！**

卍今月から16頁で頑張ってしまう。しかももう二度と連載に穴をあけないとゆう、**マジメでウソはつかないみうらじゅん**氏は、最近**「大仏連」**（大日本仏像連合）とゆうアヤシゲな団体を造り、日本中を仏像だらけにしようとたくらんでいる。まさに**歩く三丁三間堂!!**と化したそのみうら氏が、**大仏連の秘密のイベント**を開くぞ!!

日時／7月10日（金）PM六時より
場所／ホール・ジ・エアー（渋谷区宇田川町30の7）
問合せ／アンテナ21 ☎03・3463・6401
出演／**みうらじゅん　しりあがり寿　いとうせいこう**

ご利益にあずかりたい人は、こっそりと見に行ってみよう!!

♨今年で10回目を迎える、毎夏恒例となった**白虎社**の**夏期舞踏＋芸能文化セミナー体験合宿**のお知らせです。『カオスという名のミナカタクマグス的ドリームタイムへ』

期間　1992年8月17～31日
場所　和歌山県東牟婁郡那智勝浦町出合　旧出合小学校
資格　16歳以上の男女（経験不問）
参加費　一般12万円・高校生10万円（共に食事、宿泊代込み）プラス教材費1万7千円
締切　1次・7月20日2次・8月12日
定員　60名

アーティストの育成を目指し、**文化芸術に関する学校**として、舞踏講座、木村恒久氏、河内家菊水丸氏、石井聰互氏他を講師に迎えての、文化セミナーを行なう。参加希望者は、参加費・教材費・写真・履歴書を締切日までに左記住所迄お送り下さい。

〒601京都市南区東九条宇賀辺町65　白虎社
Tel075・661・5237

〽今年中に、初期作品集の刊行予定有。の、**京都のストロー級仙人のひさうちみちお**氏が**カマボコのCM**出演でお茶の間を**ギョッ**とさせています。**「そんなにみつめないでよ」**と標準語でしゃべったかと思うと、いきなり赤い棒状のカマボコが**ブルブル**とふるえる。アレですよ、アレ。一度見てしまうとなかなか頭から消えませんので、皆さんも**気をつけて下さい**。

！史上最大のテクノポップ・パーティーレギュラー#3のお知らせ!!

日時：7月12日(日) PM 2:00～10:00
場所：川崎クラブチッタ
出演：DJ／戸田誠司・白井良明・サエキけんぞう・中野テルヲ・加藤賢崇・モア・ディープ・八重樫健一他、飛び入りDJ有り
バンド：ピチカート・プレゼンツ〝女性上位時代s〟（小西康陽＋中川比佐子、渡辺満里奈他）→パールShings ハルメンズ→オーガニゼーション→LONG VACATION他♬
チケット：チケットぴあ、都内チケットサービスセンターで前売発売中!!

オリジナルブームから15年、テクノポップのリバイバル旋風が巻き起こる、**「テクノポップがもっと聴きたい！」という貴方、ぜひ行くべし!!**

♡1886年、ライプツィヒに生まれ、類い稀な性の冒険家として世界を旅した**Dr.ウィルヘルム・リヒャルト**のキスマークとエロティックな愛の記念写真に彩られた伝説の回想録が、**博士から依頼をうけた伴田良輔氏**の手によって編集され、出版されました。200余点にのぼる写真と回想を読んでいると頭がグラグラするほど面白い。**「女の都（ウィルヘルム・リヒャルト博士の性的冒険）」**（作品社刊・定価2千6百円）、絶賛発売中。

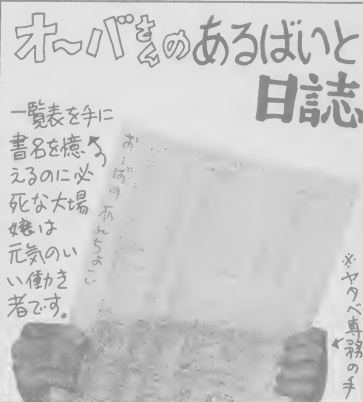
♥今月の長井勝一
『ガロ』を印刷してくれている、光栄印刷さんの招待で函館に旅行に行ったワガ会長。大沼でゴルフを楽しむ一行を横目に二泊三日酒三昧だったそうでありますが、函館の朝市で買った毛ガニを近くの料理屋さんで捌いてもらい、インタビューにお邪魔した白取・志村両編集委員に「これ食えよ」と勧めてくれました。目茶ウマのカニを一心不乱にほおばる二人をニコニコ笑って見ておられたので、「長井さんこれ食わないんですか」と聞くと、「俺カニ嫌いなんだよ」「ええ、どうしてですか」「だって面倒臭いじゃねえか」なるほど…チマチマ身を出して口に運ぶ様子は男らしくない……。でもじゃあどーして買ったんだろう、と思ったら「だって光栄さんたちみんな買ってるからよ」……男らしい……。ちなみに白取は函館出身ですが、毛ガニは4年振りでございました。編集部のみんな、ごめん。

メッセージ

♥「長井勝一賞」にたくさんの作品のご応募、ありがとうございます。現在、作品を選考中ですので、早期返却をご希望の方は、必ず「要返却」の旨明記して、返信用封筒を同封下さい。よろしくお願いいたします。

オ〜バさんのあるばいと日誌

一覧表を手に書名を憶えるのに必死な大場嬢は元気のいい働き者です。

※ヤタベ専務の手

㊂青林堂でバイトを始めて一週間め、毎日慣れない手つきで、単行本の修理などをしておりますが、或る日ふと気がつくと、指先にいっぱい、いっぱいのサ・サ・サクレができていました。シャンプーをしては「ヒィ〜ン」、ストッキングをはいては「ウヒョーッ」などと声をはりあげている仕末。昔から、親不幸者はササクレができる、というなんだか訳の解らない説があるようですが、という事は、青林堂で働く＝(イコール)親不幸という事なのでしょうか？　ちなみに私は、やさしい先輩方に囲まれて、幸せにお仕事をしています。
（大場）

残飯整理

⛩その時、「あぁっ、やっぱり……」と思ってしまったのは、多分私だけではないでしょう。変った人だ、とよく言われていましたが、その変りようが、実は凄く分りやすい人だったから。彼女が死んで、彼女とかかわった人達は生きている。ありのままの現実は、かえようがないのです。薄目をあけたまんまで……合掌。
（手塚）

◐山田花子さんの死はあまりにショックな出来事でした。ただただご冥福をお祈りいたします。
（志村）

♬読者の方から『ガロ名作劇場』は一度読んだ事もあるし、再録ではつまらない」旨ご批判頂きました。しかしその反面、昔の『ガロ』を知らない読者の方々から「こんな人も『ガロ』で描いていたとは知らなかった」「読んだ事がなかったし、新鮮だった」という好評の声も頂いています。創刊して30年近い小誌ですから、たくさんの過去の名作を知らない方にも知って頂こうと、この『名作劇場』はあるのです。また創刊当時から続けて読まれている方にも、今漫画というものが氾濫しているこの時代に、もう一度数々の名作を振り返ってみる事は、単なる懐古趣味という視点にならなければ決して無意味な事ではないと思います。将来を嘱望されていた山田花子さんのご冥福を、謹んでお祈り致します。
（白取）

✻山田花子追悼特集の為に、ご多忙中にも拘わらず、寄稿して下さった皆様どうもありがとうございました。それから、妹である私に気遣い、励まして下さった方々にも厚く御礼申し上げます。
（高市）

♨山田花子さんは24年の短い生涯を、普通の人の何十倍もの速さで走り去っていってしまった。たくさんの作品を残したまま…。
この度の緊急追悼号に際し、文章、コメントを寄せて頂いた各界の山田花子さんの友人の皆様に御礼を申し上げるとともに、彼女の御冥福を心よりお祈りいたします。
（周）

原稿の持ち込みは、必ず前日までにお電話下さい。（原稿拝見は午前中のみ受付けております）また、本を直接買いに来られる方は、営業時間内（AM 9：30〜PM 5：30）にお願い致します。

◉編集部より◉
作家の方にファンレターを出すにはどうすれば良いのか？というご質問がよくまいります。その場合は、「青林堂気付　○○先生へ」と明記して、当社宛郵送下されば開封せず、そのままその先生にお渡しします。どしどしお送り下さい。

お詫び●『ふうらい姉妹』は作者・長崎ライチさんの急病により休載とさせていただきます。ご了承下さい。

Illustrated by Yaya Takaesu

BEAM COMIX
ハルタ 2014-FEBRUARY volume 11
2014年2月27日　初版初刷発行

発行人・編集人　青柳昌行
編集　ハルタ編集部
装丁　表紙フォーマットデザイン　林健一
表紙・本文デザイン　内田圭祐（8823DESIGN）
発行　株式会社KADOKAWA
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
電話：03-3238-8521（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/
企画・制作　エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
電話：0570-060-555（ナビダイヤル）
印刷所　共同印刷株式会社

本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ
[エンターブレイン カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間 土日祝日を除く 12時〜17時）
メールアドレス：support@ml.enterbrain.co.jp
※メールの場合は、商品名をご明記ください

定価は表紙に表示してあります。

Printed in Japan
ISBN978-4-04-729438-7
C0979